５．社会活動の場としてのアートワークの実践とその効果について

平井美穂、住田淳子、竹内さをり
（特定非営利活動法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

１.はじめに

われわれは平成19年８月より若年性認知症者への支援としてアートワークという作品づくりの場を設けた。アートワークでは、若年認知症者にとって作業を通して個人の困難な点を把握できる点、作品という生産物を得ることで製作したことを忘れてしまっても思い出す手がかりになるという利点を考え、絵を描くという作品づくりを活動として選定した。

若年認知症者がアートワークを通して自己表現を行い、その場に参加することにより、自信の回復、新しい能力の発見、社会との交流につながるよう支援することを目的とし、様々な検討を行い実施している。

本論では、アートワークについて紹介し、参加した若年性認知症者とその家族の経過について報告する。

２．方法と内容

参加者はサポートセンターで把握している若年性認知症者で社会サービスにつながりがなく閉じこもりがちな方や地域包括支援センターからの依頼で相談対応の必要性がある方である。

スタッフは美術経験のある介護福祉士（アートワーク作品の企画、準備、会の進行を担当）１名、認知症ケア経験のある看護師（サポートおよびサービス利用調整を担当）１名、作業療法士（参加者の状態評価および経時的評価、サポートおよび企画を担当）１名の計３名であった。また、参加者の人数に応じて介護福祉士や介護支援専門員などがスタッフとして参加した。

表5－1. アートワークの流れ

13:00頃	会場到着 お茶を飲みながら参加者の近況を伺う
13:30	開会・自己紹介
13:40	作品づくり
14:40	後片づけ
14:50	茶話会 お茶、お菓子を食べながら完成品の感想を話す
15:05	歌　季節の歌を合唱
15:10	閉会

実施時の時間と流れは表５－１のとおりである。アートワークは絵を描くという作品づくりのみをさすのではなく、参加者がその場を訪れた時から始まる。他者と場を共有し、会話を通して行う交流など、その場に参加することで得られるすべての機会がアートワークである。スタッフはアートワークの場において若年認知症者に適切な支援を行うことを目ざした関わりを実践している。

アートワークで作品を描く際には、季節に応じたモチーフを用い、実物を見る、触る、匂う、味わうなどして対象についてのイメージを膨らませる。膨らませたイメージに合った色を選び、色を重ね、最後にモチーフとして抜き取りたい部分を決定し、型紙を当てて形取る。このようにアートワークの制作工程は、構成が苦手な認知症者が遂行しやすいように工夫している。

各回実施前には、実施内容、配置、サポート方法、注意点などをスタッフで話し合った。また、各回終了後にはスタッフ間で反省会を行い、今後の方針について決定を行う。

３　参加した若年認知症者本人と家族の経過

アートワーク参加者のうち３名について、個々の状態と参加時の状況および経過を記す。

【　事例Ａ　：６３歳男性　アルツハイマー型認知症　】

１）初回評価

ＭＭＳＥ：１５点/30 点　NM スケール：21 点/50 点　N-ADL：29 点/50 点

構成障害、視空間失認、記憶障害、失行、視野障害（左同名半盲）があるが、著明な運動麻痺はなく歩行可能。階段昇降時は手すりを使用。妻と 2 人暮らし。介護保険制度を利用しており、認定は要介護１。サービスは通所介護と通所リハビリテーションを利用している。通所サービス利用時は座っていることが多く、家に居る際も自発的に動くことは無く、妻の声かけで動く状態であった。Ａ氏は発症前に絵を描いた経験がなく、苦手という意識を持っているということであったが、無趣味であったＡ氏に何かできることがあればとの妻の希望でアートワークへの参加を決定した。アートワークへの参加目的は、妻の希望でもある“本人ができることを見出し、自己表現の機会をもつこと”とした。

２）経過

計１１回参加。

①アートワーク参加時の変化

初回到着時は、表情が硬く、緊張している。時々笑顔がみられることがあるが、他者が話しをしていると孤立し、表情がさらに硬くなり困惑した様子であった。最初は緊張した様子で作業を行っていたが、回を重ねるごとに場の雰囲気にも慣れ、自分のペースで参加できるようになった。また、色を選択する際など自ら決定する

場面では積極性がみられるようになる、自己紹介では冗談を言う、質問に対する返答時にその話題を膨らませて話す、といった変化がみられるようになった。

また、参加４～７回目には他者の作品に対して感想を述べて誉める、新規参加者に対して声かけをするなどの配慮がみられるようになる。

参加８～11回には、活き活きとダイナミックな絵を描くようになり、最終日には、笑顔で「楽しかったし、こうして考えてすることはいいなあと思った」とアートワーク参加への感想を述べた。

②サービス利用の経過

Ａ氏は自宅から会場へ約１時間、電車を乗り継いで来る。屋外移動は一人では困難なためサポートが必要な状態である。初めは妻が付き添い参加したが、妻には日々の自宅での介護に加え自分自身の体調不良もあり、アートワーク参加時の付き添いについての心労が認められた。そこで、3回目からスタッフが送迎を行うこととし、同時に市のガイドヘルパーのサービス利用についても考えることとした。スタッフが送迎を経験することで、電車利用時や屋外での A 氏に対する介助点などを把握することができた。この情報は後にガイドヘルパーを利用する際に役立った。

参加 5 回目より市のガイドヘルパーを利用するようになった。最初は到着時には緊張した様子であったが、次第に慣れることができた。また、ガイドヘルパーが日によって変わっても緊張や混乱なく参加できるようになった。

③自宅での変化

アートワークに対する感想として、妻は A 氏が自宅に帰ってきた時にアートワークが楽しかった様子が雰囲気から伝わり嬉しく感じると述べている。また、A 氏は家に飾ってある作品を見ると自分が作ったことは忘れているが、自分がその作品を通じて良い感情を持ったことは覚えており、2 人で微笑みながら作品を見たとの感想を得た。

④サポートの方法

A 氏がアートワークを遂行する中で実施したサポートを表５－２に示す。A 氏の状態を捉えて検討、実施したこのサポートによりＡ氏は作品づくりをスムーズに遂行することができた。

３）Ａ氏にとってのアートワークの場

A 氏はすでに介護保険サービスを活用しながら妻との生活を送っていた。しかし、自発的に活動することが難しく、他者の働きかけが無いと動けない、楽しむことも無いといった状態であった。

Ａ氏は、アートワークにおいてスタッフからのサポートを受け、作品づくりを遂行できたことで自分自身が絵を描くことができるという経験をすることができた。アートワークに参加するＡ氏の状態は回を重ねるごとに積極的になり、緊張していた状態が落ち着き、ゆとりを持って場に存在できるようになった。さらには他参加

表5－2. A氏に対するサポート内容

問題点	サポート方法
視空間失認により紙の中で描く位置関係が分からず、描く場所を決定することや形どることが困難。	描く場所を支援者が指差して示し 描く際は手を添えて一緒に動かす。 動きが慣れるとスムーズに筆等動かすことができる。
色を変更する時や道具の変更後、作業状況が変わると記憶障害により作業方法が分からなくなり、その都度緊張して取り組む。	その都度、声かけをし説明する。
ハサミの穴に指をはめることが難しく、切る際に線をハサミに当てて切り進めることが困難。	ハサミを介助で指にはめる。切るべき線より小さめに切るため、少し大きめに線を描く。 支援者が切る方向を指差して示す。
自ら文字を書くことが困難。	サイン記入時など一文字であれば、ペンに手を添え書く方向を誘導すれば、自ら手を動かして書くことができる。
スポンジなど普段使い慣れない道具の使用が困難。	何度か手を添えて動きを一緒に遂行することで慣れて自分でも使用できる。

者に対して配慮するといった変化もみられた。自宅での様子からも、完成したアートワークの作品を通じて妻と話す際、楽しかった感じを思い出すことができている。

また、ガイドヘルパーを活用することにより、それまでは全て妻の送迎での外出であった生活から妻と離れた時間を過ごせる機会をもつことができるようになった。

【　事例Ｂ　：６４歳　女性　前頭側頭型認知症　】

１）初回評価

ＭＭＳＥ：10 点/30 点　ＮＭスケール：29 点/50 点　N-ADL：44 点/50 点

記憶力障害、滞在言語、注意維持困難、意味記憶障害があるが、運動機能には問題はなく、歩行、階段昇降などの動作は自立している。夫と２人暮らし。参加当初は介護保険等のサービス利用はなく、常に夫と一緒といった生活をしていた。アートワークへの参加目的は“アートワーク参加継続を機会に夫と離れて過ごすことができるようになること、さらにはデイサービスへの参加ができること”とした。

２）経過

計９回参加。

①アートワーク参加時の変化

毎回、夫に付き添われて参加する。夫は作品づくりが始まるまでは一緒に居るが、途中で帰宅し、帰りはスタッフが電車にて自宅まで送った。市のガイドヘルパーの利用を申請したが、市の規定に該当しないとの理由で利用することができなか

った。

B氏は夫が帰宅した直後や作業途中で夫のことを気にすることがあったが、別の場所にいることを伝えると納得して作品づくりに集中することができた。スタッフに対して楽しそうに笑顔で話しかけるが、質問に対する返答が語義失語のためにできない場合は他者に言うように勧め、場を繕う様子がみられた。

作品づくりは方法が分かれば、比較的スムーズに行うことができたが、他者より早くに作業が終わると「そろそろ帰らないといけない」と言い不安な様子をみせた。その際には、時間を費やす作業を提供すると落ち着けることが分かった。

参加5回目の到着時、B氏はいつもと異なり不機嫌であった。しかしアートワークが始まり、場に馴染むと笑顔もみられ、作品づくりはいつもどおりスムーズにできた。スタッフの認識は、その日はB氏にとって何か機嫌が悪くなるようなことが家であったのだろうかという程度であった。

しかし、5回目から年末年始により休みの入った6回目までの約1ヶ月半の間、B氏が不機嫌に怒る状態は自宅にて継続していた。その間、夫に対して言いたいことが表現できない時や思い通りにならない場面で夫を叩く、机を叩くといった状態が繰り返されていた。

参加6回目、B氏はひどく不機嫌であった。着席後はスタッフに笑顔で対応するが、度々夫を叩く場面がみられた。作品づくりでは早くできた際の待ち時間にいらつき、片付けなどを手伝ってもらっても気分転換にならず、さらにいらついた状態が継続した。以前は気分転換できていた作業行程の付加でもいらつきは収まることはなかった。不在になった夫を気にすることが増え、この状態はその後さらに増強した。

これまで作品づくりはスムーズで、困難な場面の対応もできていたB氏が不機嫌になったことに対して、対応方法の再検討が必要であると考えた。これまでは、待ち時間を片付けや作業の付加という方法を用いて対応していたが、その方法では気分転換ができないことが分った。そこで反省会にて、B氏にとって楽しく気分転換できる方法を考えた。これまでアートワークの中でB氏が最も喜びを示した場面は茶話会であったことから、不機嫌な様子がみられた際には、作品づくりとは異なる静かな場所でお茶とお菓子を食べることを提案することとし、実践した。B氏は休憩を勧めるスタッフに対して「行ってもいいの」とうれしそうに問い、喜んで提案に応じた。また、お菓子を食べながら目についた道具を自ら洗い、その後笑顔で作品づくりの場に戻り、作品を完成させることができた。また、B氏ができるお茶の準備をお願いし、他の参加者に配る機会をもつことで、B氏が積極的に他者の世話を焼こうとする場面がみられた。その日の終了時、B氏はお茶の準備をしながらスタッフに「私とてもうれしいのよ、今日は来て良かったわ」と自分から喜びを語った。

以後、9回目まで同じ対応方法で支援することによりB氏が怒る様子はみられなか

った。そして帰る時間になっても以前のように夫を待たせているからと急いで帰る様子はなく、いつまでもアートワークの場に居たい様子が伺われた。

②サービス利用の経過

参加当初から夫に対して介護保険制度の申請とデイサービスの利用について説明していたが、夫は本人には馴染めないから行かせたくないとサービスの利用を受け入れることができなかった。しかし、アートワークにおける本人の状況やスタッフの対応を見ることで、夫は介護保険制度を申請し通所介護の利用を考えるようになった。結果、４回目の参加後より週１回通所介護を利用することとなった。この際、アートワークでのすごし方を通所介護の職員に伝え、サービス導入がスムーズに行えるようにした。

③サポート方法

Ｂ氏がアートワークを遂行する中で実施したサポートを表５－３に示す。Ｂ氏の状態を捉えて検討、実施したサポートによりＢ氏は作品づくりをスムーズに遂行することができた。

３）Ｂ氏にとってのアートワークの場

Ｂ氏の参加状況からは、作品づくりを楽しんでいる様子は伺われず、また完成作品に対しても持ち帰ることの喜びはあったが、自分自身が作成したという喜びは薄い様子であった。しかし、作業を遂行する行程において、何かができる時間を過ごすことは楽しい様子であった。

また、Ｂ氏は前頭側頭型認知症にみられる注意維持困難により同じことを長く続けることや、何もせずに過ごすことができず、徐々に嫌悪感を募らせ、自分自身でその苛立ちを解消することができないために不機嫌になるということがあった。

表5－3. B氏に対するサポート内容

問題点	サポート方法
色が薄くなったり、筆が乾いたことに気づかない。	必要な場面でその都度伝える。
単調な作業ではリズムをとり歌いながら遂行するが、エスカレートすると他参加者の集中力を欠くことがある。	作業を中断するよう他の作業遂行を促す。賑やかにしゃべることを辞め、静かな環境をつくる。
他者より早くに作業が終わると不安な様子がみられる。	作業行程を付加したり、片付けを手伝ってもらうなどして、時間を費やす作業を提供する。
上記方法でも苛立ちが治まらない。	お茶に誘い、静かな場所で休憩する

Ｂ氏のこれらの状況を把握し、状態変化に応じて支援方法を検討し、変更したことで、Ｂ氏は苛立つ気分を転換することができた。さらに、元来世話好きなＢ氏が人に世話をやける状況を支援し実現することで、他者に何かができることを認識できる機会となった。

介護者である夫に対しては常に一緒にいるＢ氏と離れる機会となり、スタッフの支援を通じて通所介護の利用につながったことで、休息の時間を得ることができた。

【　事例Ｃ　：５１歳　女性　アルツハイマー型認知症　】

１）初回評価

ＭＭＳＥ：本人が受けたくないとの意思を示されたため測定できず

ＮＭスケール：27 点/50 点　Ｎ－ＡＤＬ：33 点/50 点

記憶力低下、構成障害あり。運動機能障害はなく屋内外ともに独歩可能。屋外は知らない場所では分からなくなるため付き添いが必要な状態である。

夫は死亡、成人した娘 2 人とは別居しており一人で暮らしている。訪問介護を利用しているが、それ以外に他者との関わりが少なく、一日中家に籠り、一人で過ごすという生活であった。アートワークへの参加目的として、“集団の中で過ごす機会がもてるようになり、将来的には通所介護の利用ができること”とした。

２）経過

計 6 回参加。

①アートワーク参加時の変化

会場までの往復は、初回は成年後見人が、2 回目以降は担当の介護支援専門員が付き添い行った。到着時は緊張した面持ちで、人が複数いることに対して困惑した様子であった。周囲には目を向けず体も付き添い者の方向を向いたままであった。スタッフからの話かけに対しては、緊張感が強く、目も合わせられない状態であった。そこで、アートワークのサポートは顔見知りの付き添い者が行うこととした。

作品づくりでは決定の場面では悩み、支援者に依存することが多くみられたが、初回に比べ 2 回目には自主的に取り組むことが少し増えた。完成品に対しては興味を示さず、会を通して笑顔もほとんど見られず支援者のみを注視する場面が多くみられた。しかし、一度だけ作業途中にＣ氏が汚れた手を気にした際に、スタッフが「手を洗いに行きましょう」と誘うと支援者から離れることができた。茶話会では、お菓子やお茶を口にせず、皆が話している間は無表情でうつむいているという状態であった。

帰る際に「また来てくれますか」と問うと少し笑顔になり頷く様子がみられたが、アートワークが楽しめているのかは分らなかった。

３回目のＣ氏は到着時から笑顔で、部屋に入るなり出迎えたスタッフに「よろしくお願いします」と自ら話かけるという変化がみられた。作品づくりでは、作成す

る作品を見せ、できるかどうかを問うと自ら「できると思う」と自信をもって返答した。これまで作った作品を見せるとこれは自分の作品であると認識できている様子であった。

また、司会の話に顔を向けて聞くことができるようになるなどの変化もみられた。この頃から身だしなみもきっちりし、服装にも気をつけている様子が伺われた。

作品づくりは、見本を見ながら「こんなふうに描きたい」と発言し、自ら積極的に取り組む姿勢や難しい場面でも何とかやろうと前向きな姿勢がみられるようになった。作業途中に付添い者からスタッフにサポートを交代したが、緊張感なく作品づくりを継続することができた。

帰る前にアートワークに対する感想を聞くと「ここは安心して居られる場と感じる。この場所へ行きたいと思えます。作品づくりも楽しい。」といった返答を得ることができた。

5回目には付添いは送迎のみとなり、スタッフと一緒に作品づくりを行うことができるようになり、司会に自ら話かける様子も見られるようになった。

茶話会でも他参加者と一緒にお菓子やお茶を楽しみ、歌も小声ではあるが歌うようになった。初回に比べ、最終回では笑顔も増え、楽しんで参加できるようになった。

②サポート方法

C氏がアートワークを遂行する中で実施したサポートを表５－４に示す。C氏の状態を捉えて検討、実施したこのサポートにより、C氏は作品づくりをスムーズに遂行することができた。

表5－4. C氏に対するサポート内容

問題点	サポート方法
形を描くことができず、指で方向を指し示しても描くことが困難。	形を描く際は支援者が手を添え一緒に描くことで、能動的な動きがみられる。
異なる色を重ねることが嫌な様子。	同じ色であれば塗り重ねることができるため、本人が好む方法を遂行する。
色を選ぶ時に複数の色から1つの色を選ぶことが困難。	2～3色を支援者が選択して提示し、その中から選んでもらう。

3）C氏にとってのアートワークの場

アートワークに参加するまでのC氏は家に籠り、他者と自ら関わることがなかった。C氏はアートワークへの参加により、アートワークの場を安心できる場と捉えるようになり、参加に対して意欲を持てるようになった。集団という場に参加できたことで、顔見知りの人との交流に限られた生活から、新しく出会った人との交流が築ける機会にもなった。

また、C氏は作品をつくることで、自分ができることを確認でき、自分自身が感じることを表現できる機会を持つことができた。このことはC氏が作品づくりを楽しいと表現し、自分自身ができると感じていることからも考えられる。

6　おわりに

多くの若年性認知症者とその家族に対して、このアートワークという手法を一般化するうえでは、気軽に行ける場所で高頻度に実施できることが望まれる。アートワークへの通所を行ううえで、ガイドヘルパーの活用を参加者の殆どに勧め利用を促したが、市によっては利用できないという現状もあった。利用できなかった参加者については、その後何度も市の担当部署を訪問し説明を行い、ようやく利用できるようになった。若年性認知症者がアートワークのような楽しみの場へ出かけるための移動支援の充実への取り組みも重要であると感じる。

若年性認知症者とその家族をサポートするうえで、アートワークのような場があることの大切さを実感する。今後、このような支援が社会サービスの一つとして運用、実施できることが望まれる。

６．事例報告２：社会活動の場を利用した支援とその経過について

杉原久仁子（特定非営利活動法人認知症の人とみんなのサポートセンター）

アートワークや本人ボランティアなどの社会活動の場を通して支援を実施した事例を紹介し、支援の経過について示す。

【事例１：A さん】

１．基本情報

女性　60 歳代　病名：アルツハイマー型認知症

職歴：公務員　家族：夫、娘　介護保険：要介護度１、サービス未利用

２．経過

１）発症から診断まで

X-3 年、本人は約 30 年間勤めた仕事を定年前に退職をした。しばらくは自宅で趣味継続などをしながらゆっくり過ごしていたが、半年経過後、趣味を途中でやめる、身体がしんどいとの訴え、買物の場所がいつもと同じで他に出かけないなどの様子に夫が気づいた。他に新聞を読まなくなった、高脂血症の治療に通院をしていたが、医師が何を言ったか夫に正確に伝えることができなくなった、薬の飲み忘れなどがあった。夫が認知症の疑いをした決定的なことは、本人の実家の法事について本人が電話で兄弟と打ち合わせを行ったときの、場所や時間などの混乱であった。夫は、映画「明日の記憶」を見た経験があったので、これは退職後の気のゆるみではなく、病気なのではないかと感じた。

通院していた病院の脳神経外科に行き、ＣＴ検査を受けた。画像診断では所見無しと判断を受けた。しかし、医師からもし認知症が気になれば、神経内科へと言われたので同病院の神経内科へ診察に行った。同じ病院の循環器内科に通院していたので、その内科の関連だからと夫が本人に話をし、本人は抵抗感なくスムーズに神経内科を受診することができた。しかし、そこでも問題ないと言われた。

その後、物忘れ、同じ話の繰り返しや意欲低下が続いたので、本人の環境を変えるために、夫は退職をして毎日本人に付き添った。半年後、再度病院を訪ね、２度目の神経心理検査と初めての MRI、SPECT を行った結果、アルツハイマー型認知症（以下、AD）の疑いがあるとの診断を受けた。

夫は、認知症がどの程度かと客観的に知りたく思い、介護保険サービスの手続きを行ったが、認定調査の時に、本人が怒り、訪問調査の面談は病院で行ってもらった。その結果、要介護１の判定を受けた（初めての診察から１年後）。

要介護認定を受けてから、夫は「認知症についてのもやもやが消え、介護に対しての覚悟が決まった」と話している。本人の様子では、物忘れ以外に感情の起伏が

目立ち出はじめた。夫が今後に不安を感じたので、主治医に相談の上、A病院にX－1年に転院した。また同時に介護の方法について同じ病気の立場にある家族の話を聞きたいと思い、B家族会を知り入会した。またC市相談機関にも数回相談に行った。

2）家族会への参加

B家族会では夫は同じ病気の家族やサポーターに相談ができ参加を継続できたが、本人に告知をしていないので、本人を会に参加させる方法や、会に参加した場合、本人が傷つくのではないかということを心配していた。本人が他者との接触に消極的だったこともあった。

B家族会での本人の集いに、夫自身が参加し、自分の体験で確かめ、しばらくは、B家族会の外出行事のみの参加を半年続け、本人に抵抗感がなくなったころで、外出以外の定例会にも夫婦で参加をしはじめた。本人はB家族会参加し、「家でじっとしている時より、皆とお話が出来て気持ちがすっきりするので、いろんな方と出会う機会が大切ね」と言えるようになった。

B家族会側での工夫としては、①本人と同年代のサポーターとじっくり話しをする機会を作った、②他の参加者の活動の準備やコーヒーの準備など役割を作った、 ③本人同士の会話を楽しめるように配慮するなどをおこなった。

認知症が進んだ他の参加者や車いすでの参加者に触れたとき、本人がどんな反応をするのかなど、心配をしていた部分もあったが、特に大きな混乱は見受けられなかった。しかし、告知をしていないということを夫が気にしており、「認知症」の言葉が入る研修の時などは、夫がその場を避けて、室外で過ごすように配慮している。

3）NPO法人認知症の人とみんなのサポートセンターとの関わり

B家族会に参加後、NPO法人認知症の人とみんなのサポートセンター（以下、当法人）主催の診断後支援プログラムに夫が継続参加し、第3回の「アロマセラピー」のプログラムのみ夫婦で参加した。他の回に本人が参加しなかった理由として夫は、①受診日と重なることもあり、時間の調整が本人にとっては負担である、②告知をしていないので、認知症という言葉を本人に聞かせたくないと述べている。

B家族会で行ったアートワークに本人が積極的に取り組んでいた事実もあり、本人に外出の機会を増やすことや自己表現ができる場を作るため、当法人からアートワーク参加の声賭けを夫に行った。最初はA病院の回想法と連日になるので本人が疲れるのではないかと夫が懸念し、参加を見送っていた。その後夫自身がアートワークに単独で参加をして、自分で作品を作り、確認をした上で、妻の参加を検討した。

4）アートワークへの参加

X年4月、初めて本人が当事務所でのアートワークに参加した。本人は緊張した様子であったが、スタッフは、以下の内容をアセスメントした。

・行動面はほぼ自立

・即時記憶は低下。B家族会やA病院での回想法のことは覚えている。過去の記憶は

保たれている。
・集中すると注意分散せず、作業に集中すると周囲の声かけが気にならない様子。絵を描いていても同じところばかりを描く。ほかの場所を描く見本を示すとほかの所に描ける。
・作品が小さい。
・字を書くことはできる。
・はさみを使って思った形に切ることができる。
・見本どおりに作りたいと思う気持ちがある。
・方法は教えてほしいが、自分のやり方に指図されたくないと思う気持ちがある。

以上をアセスメントしたうえで、スタッフは以下の対応を心がけた。

・楽しめる環境を作る
・緊張をほぐすように働きかける。
・否定しない。それでよいことを伝える
・迷ったら方法を伝える

２回目の参加は、本人が少し落ち着いてきた様子であり、スタッフは本人のできるところを見極めて、迷うところを支援し、他者への感想を述べてもらうなど得意なことをしてもらうように行った。その後も、本人がやりたい方法を尊重し、迷ったところだけ手伝うようした。本人は、回を重ねるごとに、意欲の高さ、絵を描くことの楽しさを表現し、自分の意見を積極的に言えるようになった。

一方、同行している夫には、初回の参加後、スタッフから本人への肯定的な感想や認知症の症状について具体的に伝えた。夫は「妻の意外な面がわかった」と言った。３回目以降は、夫はアートワークの場から離れ、当法人の事務作業を手伝いながら、他の家族と交流や情報交換を行っている。

３．考察

１）告知に関して

夫は、本人に告知をしていないので、告知をした方がよいのかどうかずっと迷っている。このことを、X 年に D 社協の講演会で夫が介護経験の講演を行った際、以下のように話している。「『明日の記憶』では医師が主人公にハッキリと告知していましたが、医師からも私からも妻には病気の告知をしていませんでしたので、ここで（要介護認定調査時）本人への告知について考えなければならない課題が生じました。妻は自分の記憶力が衰えてきていることは意識していますが、これは緊張感が無くなったからとの思いで、自分自身が認知症であるとの自覚は持っていません。そういうことで、告知については悩ましいところもあり、今のところは自然に話が出来るきっかけがあった時に話そうと思っています」。夫は、本人が①要介護認定調査時に烈火のごとく怒ったこと、②時々、落ち込んで部屋から出てこないこともあ

ることなどを考慮して、迷っているのではないかと思われる。

現在まで、告知の話は本人とはまだ行っていない様子であるが、B家族会、当事務所でのアートワーク時において、時に物忘れや認知症という言葉を本人が耳にしても、動揺や混乱は見られないようである。

告知の是非の議論は他に譲るとして、告知をしていると、本人が社会資源を利用するときに、参加の理由を本人が納得し、目標設定を本人、家族、スタッフ間で共有しやすい。また、本人が安心して病気のことをスタッフや同じ参加者に口にできることもあり、より深い信頼関係が成立するのではないだろうか。「忘れてしまった」と本人が口にできる場は、本人にとって心地よい安心した場所だといえる。

2）家族の持っている力

夫婦は長い間、共働きであり、仕事、子育て、家事などを協力、分担しながらすすめてきた。妻が発病した時に、夫は映画で若年認知症を知っていたことも重要な要素であったが、比較的病気をスムーズに受け入れ、相談機関や家族会などを探して、相談や他の家族の経験を聞くことに積極的であった。また告知をしていない本人が参加をしても大丈夫なところかどうか、まず夫自身が経験をして確かめるということを行っている。介護保険サービスの利用を支援者たちがすすめても躊躇する家族は多いが、Aさんのように、家族が理解し、積極的なことはサービス開始につながりやすい要因である。

3）アートワークの場

Aさんの日常は夫と行く買物以外、ほとんど出かけることはなく、夫の話によると半日くらいは身体の調子が悪いと横になっていることが多かったという。

Aさんがアートワークを開始して数か月経過したが、Aさんにとって、アートワークの場は以下のような意味をもつと言える。

①外出できる機会
②楽しめる
③人と話ができる
④自分自身を作品や言葉で表現できる
⑤自分が作った作品に満足感を得られる
⑥マイペースを貫くことができる

アートワークへ参加する時の、Aさんの服装はスーツであることから考えても、Aさんはアートワークの場を日常ではない“ハレの場”として捉えていることがわかる。参加への回を重ねるごとに意欲、積極性も増していき、自分の意見も言えるようになってきた。Aさんの職業歴から推測すると、Aさん自身は、頑張りやであり、自分の意見を積極的に言えてきた人ではないかと思われるが、アートワークによってその一面を少しでも取り戻すことは、本人の自信を回復させることにつながっていると思われる。

4）支援のポイント

スタッフは、支援のどのようなところにポイントを置いてきたのだろうか。本人、家族それぞれに以下のことが考えられる。

本人に対して

①本人の話がしたいという思いを実現できるように場を提供した

②本人の方法やペースを大切にし、アートワーク参加を楽しめるようにした

③本人の苦手なところ、できるところを見極め、高い満足感を得られるような作品作りを提供した

家族に対して

①病気や介護について学ぶ場を提供した（診断後支援プログラム）

②他の家族と交流、情報交換できる場を提供した（家族会、アートワーク）

③本人ができること、得意なことを家族に伝えた（アートワーク）

④今までの介護経験を振り返る機会を提供した（社協での講演）

⑤本人より先に経験をして確かめて本人を誘うという夫の姿勢を受け容れた（家族会、アートワーク）

⑥夫にも、事務作業の手伝いを頼み、本人への同行だけでなく、夫の役割も作った（アートワーク）

以上が考えられるが、今後、介護サービスを利用するにあたって、本人への告知がキーワードになることが予想される。また本人が、病気に関して自分の気持ちが誰かに話せることができているかどうかも心配な点である。

【事例２：Bさん】

１．基本情報

女性　５０歳代前半　病名：アルツハイマー型認知症

職歴：大学時代に結婚後、専業主婦をしていたが、子育てが終了し福祉関係の仕事を行っていた。

家族：夫　娘２人

２．利用までの経過

夫が若年認知症コールセンターに相談をして、A相談機関を紹介され、そこからB家族会を紹介された。B家族会では、本人が日常的に通える場が必要との判断をし、当法人で行っている本人ボランティア活動への参加を提案した。

発症時期は、X―４年ごろであり、X－２年に診断を受けた。診断直後、夫が友人（公務員）に相談をしており、当法人への相談時には、障害者年金、精神障害者手帳２級、自立支援医療、介護保険などすべて申請済みであった。要介護度はまだ決定しておらず、介護保険サービスは利用していなかった。

X 年３月、当法人の本人ボランティアに娘と参加し始めた。初回は緊張がうかがえたが、しだいに他の参加者となじむようになった。他の参加者が休むと「○○さんは？」（○○はＢさんがつけた呼び名）と休んだ参加者のことを尋ねたり、Ｂさんにとって母親的な存在のＣさんの誕生日には、Ｂさん母娘がプレゼントをする様子などが見られた。最近は、Ｂさんから「（集まっている）みんなでどこかに行きたい」という発言がよく聞かれ、本人ボランティア活動の仲間と楽しそうに交流している。

本人ボランティアで今まで行った主な作業は、スタンプ押し、シュレッダーがけ、シュシュの材料をゴムに通すなどである。どれも声かけだけでは難しく、スタッフもしくは家族が隣について説明をしながら一部分だけを本人が行うという方法をとっている。

３．家族への支援

本人ボランティア初回参加から、毎回家族の同行（夫、娘など）があった。夫については、最初の３か月はほぼ毎回面談（週１回）を入れ、夫の困っていることなど話しを聞いた。娘は２人とも、「母も心配だが、父を支える人がいないので、そのことも心配だ」と口にしていた。娘同士は、母親に関しては、話し合いながら協力できているようであった。家族の中で「お母さんのことは次女が対応する」と暗黙の了解ができているようであった。旅行や日常生活において、次女が主に母親への対応（トイレ時など）を行っており、次女はそのことに対して、「しんどいとは思わない」と発言をしていたが、夜にアルバイトをしていることもあり、疲れをためないように、夫（娘にとっては父親）は配慮しているようだった。

介護保険利用などについては、家族誰もがその必要性をうすうすと感じてはいるが、口にしたくないと思っており、家族だけで何とかしていこうという気持ちが見受けられた。以前、発症後の本人に親しく近づいてきた人が自宅に上がりこみ窃盗を行ったという経験もあって、家族はたとえヘルパーであっても他人を家の中に入れたくないと思っていた。専門職であっても信頼できないという気持ちは、本人ボランティアや他の集いなどに参加したとき、本人がひとりぼっちになったらかわいそう、トイレに行きたくなったらどうしたらいいのかという発言にみられていた。「スタッフは十数年の介護の経験があるプロだから大丈夫」と家族に説明しても、納得がいかない様子だった。

そこで、娘とスタッフで交換日記を行うことを提案した。娘からは、家庭での様子や困ったこと、エピソードなどを記入し、スタッフからは、娘の質問への回答（トイレのことなど）、本人がどんなことができたが、できなかった部分はこんなサポートがあればできた、また本人が思っているであろうことの代弁（言葉は出にくくなっているが、娘に対する思い）などを記入した。また、次女は、本人のことを「Ｄちゃん」と下の名前で親しみを込めて呼んでいたが、本人は「お母さんと呼ばれた

い」と言っていたので、そのこともノートに書き、結果、次女は「おかあさん」と呼び始めた。

4．移動支援サービスの検討

スタッフが移動支援サービス申請を勧めると、夫はすぐに申請を行った。しかし、行政窓口で「まず、ケアプランをケアマネジャーに作成してもらって、そこで介護保険にはないサービスだということを証明してもらってから再度、申請手続きを続けてほしい」との返答だった。スタッフはその相談を受け、E 事業所のケアマネジャーに間に入ってもらい、調整を依頼した。1ヵ月後に、利用可能となったが、1ヶ月に利用できる時間数は短く、移動の時間のみ支援する（本人ボランティアの作業時はつかない）という時間設定になっており、利用しにくいことや、家族の「自分たちだけで大丈夫」という思いから、利用には至っていない。

5．介護保険サービスを利用するまで

X 年8月、本人はデイサービスを利用（毎週水曜日）しはじめた。直接のきっかけは、本人が「やせたい」と言った言葉をスタッフが聞き逃さず、家族に「スポーツジムのようなデイサービスがある」ことを伝えたことだった。夫はすぐに、F 事業所ケアマネジャーに相談をして、数ヶ所見学に行き、数週間で利用開始となった。

それまで家族は、介護保険を利用したくない、まだ大丈夫だと考えていたが、介護保険利用に至った要因は以下のことが考えられる。

①本人が集団の中になじめた、集団を楽しむことができた

②そのことを家族が見て納得、安心した

③スタッフが介護保険サービスの情報を提供した（スポーツジムのようなデイサービス）

④自分たちだけでなくても、他の人たち（専門職）にまかせてもよいと家族が思えるようになった

⑤交換日記やスタッフの助言により、本人ができること、むずかしいことなどが明らかになった。

以上5点が考えられるが、さらにその背景には、

①当法人利用開始からの3ヶ月間、スタッフが家族の訴えを聞き、細かいアドバイスを行ったこと

②本人ボランティアの場が持つ力（本人の自信、意欲の回復）

などがあげられる。

本人ボランティアの場には、B さんはワンピースやスカートなどを身につけて来所をしており、参加者から「きれい」「スタイルがいいね」と賞賛されていた。もし、B さんが自宅に閉じこもったままであったとしたら「痩せたい」という発言もみら

れなかったのではないだろうか。またスタッフがその言葉を良いチャンスと捉え、家族に介護保険サービス利用を勧めたことで、機を逃がさずに利用することができた。

B さんがもし自宅で過ごしているだけの生活を送っていたとしたら、介護保険利用に結びつくことは難しかったが、本人ボランティア活動やアートワーク参加により、本人も家族も前向きにサービスを利用することができたと考える。

資料１）事例分析シート

どのような時期に、どのようなアセスメントやコーディネートが必要であったか

事例（60 歳代女性、夫と二人暮らし）の経過

時期	状　況	本人への支援	家族への支援	ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ
活　動 導入	家族会には参加されているが，他のサービスは利用していない．本人が外出する機会も少なく，なんらかのサービスが必要ではないかと思われる．家族は病気の進行への不安がある．本人の外出する機会が少ない．病気進行への不安あり．	外出のきっかけとしてｱｰﾄﾜｰｸ（AW）を紹介．[外出のきっかけとしての提案]	外出のきっかけとしてｱｰﾄﾜｰｸ（AW）を紹介．[外出のきっかけとしての提案]	
X 年 7/17 活　動 開始	AW に参加．本人は「できない」と拒否的．夫は「先生がしたのでしょう」と本人ができることを認めない．また，厳しい口調で本人の作品つくりに口を出すことがある． 本人は自信喪失で拒否． 家族は、本人の能力を否定的に見ている．	無理強いせずに，励ます． 無理に勧めない． 励ます	本人の作業の様子を見てもらう． 家族にも言いたいことを言ってもらう． 本人の様子を見てもらう 家族の思いを否定しない	
8/21	本人は気乗りしない様子．夫も半信半疑の様子で連れ出している．本人は AW での参加者同士の会話は楽しまれ自らの発言もある．家族の会と混同している．夫のことを気にする．お茶をのんだり，おやつを食べたりしない． [半信半疑][緊張] 他の場と混同している	ＡＤＬ・サポートの見極め 他の参加者との会話を促す スタッフより家族を含めて再度 AW の説明をする． AWに参加する意味を伝える 他の参加者との会話を意識的につなげる	作業の状況などを伝える． スタッフより本人を含めて AW の説明をする． 参加した時の様子を報告する． AW に参加する意味を伝える．	

9/4	場には慣れてきた. 夫の途中退室も明るく見送る. お茶やおやつを口にするようになる. 他者との交流も見られる. 夫は「本人は拒否的で, 行きたがらない. 絵を書くのも嫌だし, 家族会と比べ, 人数が少ないことが気に入らない」とのこと. 自分がいないと駄目だと夫は思いこんでいる. 妻の作品に対してもまだ批判的な態度. トイレの便器が分からないが, 蓋を開けて示すと後はできる. 慣れてきた様子. [他の参加者との交流] [家族依存]	ADL・作業のサポートの見極め	作業の状況などを伝える	
9/18	制作中の表情が良くなる.「人と同じ表現は嫌なの」と自分らしさを表現したい気持ちも表れ始める. スタッフが本人の思いを聞き取り夫にもさりげなく聞いてもらう. 自分の気持ちを話すことができるようになる（できたことができない, 何もしたくない）. 今までと同じではないが, 新しい自分をみつけようという提案に納得された様子で, 社会に向けてのメッセージ作成に協力する. 夫が実物と違う色だと指摘したことに対し, 本人は「いいのよ, 私が気持ちよく描いているんだから」と言う. [表情の変化][自分らしさ][新しい自分を見つける]	本人の気持ちの聞き取り 新しい自己認識の提案 本人のそのままを肯定する. ガイドヘルパーの利用を勧める. 本人の気持ちを聞く 新しい自己認識の提案 本人のそのままを肯定 参加継続のための	本人の気持ちを聞いてもらう. 本人に対してスタッフが肯定していることを示す. ガイドヘルパーの利用を勧める. 本人の気持ちを聞く場に同席してもらう スタッフの姿勢（本人への肯定）を示す 参加継続のため	本人に合うガイド事業所, ガイドヘルパーを探す. ガイド事業所との連絡 ガイドヘルパー事業所を探す

		工夫（ガイドヘルパー）提案	の工夫（ガイドヘルパー）提案	
10/2	ガイドヘルパーの初めての利用.ガイドヘルパーがサポートし製作を行う.本人はガイドヘルパーと打ち解けている.	ガイドヘルパーに慣れる様に配慮する	ガイドヘルパーとの様子を伝え,安心してもらう	スタッフがAWの補助をしているのを見てもらう. サポート方法を伝える
10/16	夫がいなくても気にならない.トイレの流し方など自分から助けを求められる.作業での戸惑いなく「絵を描くのが嫌」という発言が無くなる.制作を楽しむことができるようになる.帰ろうとする他の参加者を引き止める. [できないことへのサポートを求めることができる][AW 制作を楽しむことができる][他の参加者のことを考えることができる]	ＡＤＬ・作業のサポートの見極め 他の参加者との交流		
11/ 6 ～20	楽しそうに製作.絵具の蓋を開けるなど出来ることが増える反面,空間失認が疑われる行動が目立つ.色の見分けがしにくいと言われる. 前歯がぐらぐらしている.	本人の身体状況の観察 ＡＤＬ・作業のサポートの見極め	空間失認があること、同時に生活行為の支援方法を伝える. 前歯のことを伝える 作業する中でわかった障害内容やサポート方法,身体ケアについて伝える	
12/ 4	夫は地域ボランティアに参加するようになる.足の爪が食い込み.右足親指から出血のため処	他者との交流 本人の身体状況の観察	夫がボランティアに参加する時間を作る	